

黙示録2章18-29節 「腐敗した教会」

1A 裁き主なるイエス 18

2A 初めの行いにまさる愛 19

3A イゼベルという女 20-23

1B 淫らな行いと偶像礼拝 20

2B 悔い改めの機会 21

3B 死病 22-23

4A 持っているものの保持 24-25

5A 諸国の民の支配 26-29

本文

今晚は、黙示録 2 章 18-29 節です。主が、「今ある事」として使徒ヨハネに伝えておられる、アジアの七つの教会に対する使信の第四の教会になります。ティアティラにある教会です。

¹⁸ また、ティアティラにある教会の御使いに書き送れ。『燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝く真鍮のような神の子が、こう言われる——。¹⁹ わたしは、あなたの行い、あなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っている。また、初めの行いにまさる、近ごろの行いも知っている。

²⁰ けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは、あの女、イゼベルをなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。²¹ わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は淫らな行いを悔い改めようとしない。²² 見よ、わたしはこの女を病の床に投げ込む。また、この女と姦淫を行う者たちも、この女の行いを離れて悔い改めないなら、大きな患難の中に投げ込む。²³ また、この女の子どもたちを死病で殺す。こうしてすべての教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知る。わたしは、あなたがたの行いに応じて一人ひとりに報いる。

²⁴ しかし、ティアティラにいる残りの者たち、この教えを受け入れず、いわゆる「サタンの深み」を知らないあなたがたに言う。わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。²⁵ ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかり保ちなさい。²⁶ 勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。²⁷ 彼は鉄の杖で彼らを牧する。土の器を砕くように。²⁸ わたしも父から支配する権威を受けたが、それと同じである。また、勝利を得る者には、わたしは明けの明星を与える。²⁹ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。』

七つの教会のうち、最も長い箇所です。ティアティラという町は、七つのうちで最も小さい町だっ

たそうですが、最も多くイエス様が彼らに語っておられます。

1A 裁き主なるイエス 18

¹⁸ また、ティアティラにある教会の御使いに書き送れ。『燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝く真鍮のような神の子が、こう言われる――。

ティアティラは、前回見ました、ペルガモンの教会から南東に約 65 キロメートルに位置する町です。この地域の中心都市ペルガモンや、次に出て来るサルディス、それからエペソをつなぐ交通の要所でありました。ギリシア帝国からペルガモン王国の中に入り、そしてローマ帝国の統治に組み込まれました。ティアティラが小さな町であったのは、ここが、リュウコス川沿いの肥沃な平原に町がつくられているからです。つまり自然の要害がないのです。肥沃な平野ですから、軍事的には外部の攻撃から自分たちを守ることがなかなかできない難所でした。それで、戦争が起こるときごとに攻撃されて何度も町が壊されたそうです。そこで、東方からの敵軍が首都ペルガモンに進軍するのを遅延させる駐屯地となりました。

しかし、交通の要所であることから、商業の町として発展します。パウロが第二次宣教旅行を始め、初めてヨーロッパに入ったピリピの町での出来事を思い出してください。パウロが安息日に祈り場で、川岸のところに行きそこで福音を語りました。そして使徒 16 章 14 節にこう書いてあります。「リディアという名の女の人が聞いていた。ティアティラ市の紫布の商人で、神を敬う人であった。主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた。」リディアという女が信仰を持ちましたが、彼女はティアティラから来た紫布の商人でした。軍事的には攻撃にさらされ、町が破壊されていた歴史を持つ市民たちは、生き残るために一致団結する結束力を強めて行きました。そこで、同業組合（ギルド）が誕生しました。この町には羊毛、紫布、亜麻布、衣服の他に、土器、銅細工、染料などの多くの組合があったそうです。実は、イエス様がここでティアティラの教会に語られている中に、これらの商品のことを思い起こさせるものが多く出てきます。

ティアティラには、スミルナやペルガモンにあるような強烈な皇帝崇拜はありません。しかし、このギルドが経済活動の中心であり、その中で享楽もあり、偶像礼拝もあり、性の乱れがありました。しかし、そうした場に自分も参加しなければ、ギルドに留まることができず、それでキリスト者は強い圧迫を受けていたのです。「生きるためには仕方がない」という言葉を私たちは使いますが、主は明確に、「でも何のために生きているの？」と問い返されますね。福音のために命を失うなら、それを救い、救おうとするなら失うと主は言われました。けれども、それはこのようなことをしてもよい、という偽りの教え、偶像礼拝と淫らな行いを取り入れる教えを、一人の女預言者イゼベルによって広められていった、というのがティアティラの教会の背景です。

ペルガモンにある教会の問題は、「妥協」でした。イエス様は、「あなたは少しばかり責めるべき

ことがある」と言われました(2:14)。全体としては、殉教したアンティパスのように、迫害されても信仰を棄てなかった忠実さがありました。けれども、そこに妥協が少しばかりあったのです。バラムの教えが、入り込んでいたのです。しかし、ティアティラにある教会は、イゼベルによって教会全体がその教えに染まってしまいました。船で例えるなら、ペルガモンの教会は船底に穴がわずかに開いていて、浸水が起こっているのに対して、ティアティラの教会は水が完全に船の中に入り込んでいて、船全体が沈没しそうになっていると言ってよいでしょう。その中で、主ご自身が、わずかに残っている忠実な者たちを救い出されるという働きをされます。ペルガモンの教会が妥協している教会であれば、ティアティラは、すでに腐敗している教会と言ってよいでしょう。

ここで、イエス様はご自身を、「燃える炎のような目」を持っていると紹介されます。主が、ヨハネに現れた時の一部の姿であります。これは主が、「どんな隠れたことも見ておられて、明るみに出して、それを裁かれる」という意味合いです。主なる神は、燃える炎で多くの不義を行なう者たちを焼き尽くされました。預言者エリヤを捕えに来た者たちが、天からの火によって焼き尽くされたことが書かれています(2列王 1 章)。主は、火をもって来られる、裁かれることが、新約聖書にも書かれています(Ⅱテサロニケ 2 やⅡペテロ 3 章)。教会に暗闇の業が行なわれているのであれば、主はそれをも見ておられ、裁きを行われるのだということを知る必要があるでしょう。

そして、「その足は光り輝く真鍮」とあります。エゼキエル書のケルビムの上に座しておられる主の姿にも、その足が光り輝く真鍮でした。これは天の純粋さが地においては裁きとなって現れることを意味します。そのお姿をもって、主に背いていたイスラエルの民を裁かれました。エルサレムにおいて、神のしるしが額にある者は救われますが、そうでないものは殺されました(9 章)。主はこの足をもって地上に戻って来られ、諸国の軍隊を踏みにじられますが、神の民である教会にも裁きの手が及ぶのです。

そして特筆すべきは、主がご自身を、「神の子」と言われていることです。ティアティラの人たちは、アポロを自分たちの守り神としており、「神の子」と呼んでいましたが、いいえ、主ご自身が神の子として現れています。イエス様は地上におられる時、人の子とご自身を呼ばれていましたが、悪霊どもが、「いと高き方の子」と叫び、それを主は黙らせました。またペテロが、イエス様を「生ける神の御子キリスト」と告白した時に、それを他の者たちには言わないように、と戒められました。このように、地上においてのへりくだるお姿があるのですが、しかし信じる者には神の子、御子ご自身として現れてくださり、そして世界に対して再臨の時に神の子として現れるのです。詩篇 2 篇を開いてください、主がここで語られているのは、詩篇 2 篇が背景にあります。「2:7-9 **私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。9 あなたは鉄の杖で彼らを牧し陶器師が器を砕くように粉々にする。』**」ここの、「あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。」というのは神の御子の宣言です。イエス様を神

がよみがえらせりことによって、この方がご自分の子であることを公にされました。そしてこの方が天において神の右の座に着いておられ、戻られる時に諸国の軍隊をことごとく打ち砕き、そして鉄の杖で強く治められるのです。

2A 初めの行いにまさる愛 19

¹⁹ わたしは、あなたの行い、あなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っている。また、初めの行いにまさる、近ごろの行いも知っている。

主は、他の教会に対するのと同じように、「知っている」から始めておられます。ここで注目すべきは、エペソに対するイエス様の言葉、「初めの愛から離れてしまった」という言葉ととても対照的なことです。むしろ愛と信仰、また奉仕に優れていて、初めの行ないよりも優っているのです。最も大事なこと、愛することを第一として、そして愛による信仰の働きがありました。それが、人々に惜しみなく分かち合う奉仕へとつながっていました。そして、奉仕するにあたって労苦が伴いますが、耐え忍んでいます。

3A イゼベルという女 20-23

したがって、ティアティラの教会は、これら愛と信仰の行ない、その奉仕において優れていたといえることができます。ところが、エペソにある教会とは逆の問題がありました。エペソにおいては、偽教師が入ってきてもそれに我慢することができず、追い出したのですが、ティアティラはその反対に、偽預言者を何ら試すことなく、受け入れていったのです。

そういうことがあり得るのか？と調べてしまいますが、事実、教会の歴史でそれが起こっていましたし、今もあります。教会史において、すばらしい愛の奉仕、信仰の証しが個々の人々、またはグループにおいてあったにも関わらず、指導層の中で世の権力と腐敗と何ら変わらない、恐ろしいことが平然と行われていたということがあります。玉石混交といいますか、ごった煮と言いますか、どちらもあったのです。教会は、罪を受け入れない、聖なる存在でなければいけません。使徒の働きで、アナニアとサツピラが、その偽善の罪でその場で倒れました。ところが、罪に対する悪い意味での寛容が起こり、そのまま全体を腐敗させていく、パン種が粉全体をふくらませるということが起こるのです。

1B 淫らな行いと偶像礼拝 20

²⁰ けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは、あの女、イゼベルをなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。

ここに、「なすがままにさせている」が、ティアティラにある教会の大きな問題でした。ペルガモン

にある教会では、偶像礼拝と淫らな行いをよしとしていたバラムの教え、またグノーシス的なニコライ派の教えが入り込んでいたという問題がありました。妥協があったのです。しかし全体としては、信仰を棄てず、抗っていました。けれども、ティアティラにおいては、なすがままにさせる、つまり、その教えを試すこともなく、悪魔に立ち向かうこともなく、そのまま受け入れるままにさせていたのです。

私たちの信仰には、「戦う」という要素があります。ユダの手紙に、こうあります。「3-4 愛する者たち。私たちがともにあずかっている救いについて、私はあなたがたに手紙を書こうと心から願っていましたが、聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。4 それは、ある者たちが忍び込んできたからです。彼らは不敬虔な者たちで、私たちの神の恵みを放縱に変え、唯一の支配者であり私たちの主であるイエス・キリストを否定しているので、以下のようなさばきにあうと昔から記されています。」神の恵みを放縱に変えた、とあります。私たちは、この世に生きていますが、この世のものではありません。主の御名のゆえに、この世の流れとは真っ向から反対するところに、信仰を保っています。しかし、その戦うこと、抵抗することの要素を、「それは偏狭である、キリスト者は、愛ではないのか」と神の恵みを放縱に変える態度をとるならば、それはここに書かれているように「唯一の支配者であり私たちの主であるイエス・キリストを否定している」こととなります。

「あの女、イゼベル」であります。これは彼女の名前ではないでしょう。明らかに、旧約聖書の人物イゼベルを指しておられます。この女は、教会において預言者を自称していました。多くの者たちが彼女の働きは優れていると思っていたことでしょう。しかし、主はそのように見ておられませんでした。その名が示すとおり、その女預言者がしていたことは、預言者エリヤを神が遣わされた理由ともなった女、イゼベルと同じ事をしていたのです。旧約時代のイゼベルについては、北イスラエルの中で、これまでになかった悪を行かせた黒幕、張本人であります。シドンの王の娘でありましたが、イスラエルの王アハブはヤロブアムが建てた金の子牛だけでは飽き足りず、シドンにまで行き、そこで彼らの拝むバアルを拝み、仕えました。そしてイゼベルがイスラエルに来てからというもの、サマリヤにバアルの宮を建て、祭壇も築きました。そして、イスラエル人たちが国民こぞって、バアル礼拝をするようにさせたのです。しかし、その時代はシドンとの交易によって国は豊かになりました。したがって、イスラエル人は国が豊かにされているのだから、大きな問題ではないと思っていたことでしょう。これがティアティラの教会でも起こっていたことです。異教における忌まわしい慣わしが、商売の名の下で教会でも許されるということ、まことしやかにこの女は教えていたのです。

そして、「わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている」と主は言われています。これは実に生々しいです。主が、「わたしのしもべたち」と言われています。主のしもべであっても、淫らなことを行ない、偶像に献げた物を食べていたのです。おそ

らく、「寛容」という名の下で行われていたのでしょう。反対する、戦うということは非キリスト者的である。キリスト者は愛が特徴であり、寛容が愛であり、だから戦うことは間違っている、とします。神の恵みを放縱に変える偽りの教えです。アハブがそうであったように、いつの間にか自分のやりたいこと、願っていることに歯止めがなくなり、それをなすがままにすることのほうが善である、正しいことであると思ひ込みます。

教会の中で、世的になることを強烈に推進しようとする力が働きます。聖なること、正しいことを心から求めるべき交わりに、自分のわがままを貫こうとする、しかも貫くために、人々を巻き込む。そして、心がしっかり定まっていな人々を誘い出して、主からますます離れていくようにさせます。教会の中に入り込んだ偽教師を真正面から取り扱っている第二ペテロと、ユダの手紙にそのことが書かれています。神と人に仕えるのではなく、言葉巧みに自分自身に仕えさせようとしています。現代の社会は、まさにそうです。自己愛のゆえに人々を巧みに操作する病が蔓延しています。

2B 悔い改めの機会 21

²¹ わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は淫らな行いを悔い改めようとしない。

ここに主の忍耐が記されています。主はご自分の憐れみによって、人々を悔い改めに導かれようとしています。「ローマ2:4 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。」ですから、私たちは主の憐れみの中で早まった判断をせず、主が明らかにされるまで忍耐して待つことが必要です。ところが、彼女は悔い改めません。それは、他の愛と信仰、奉仕と忍耐の行ないという教会の雰囲気の中で、巧みに覆い隠されています。しかし、主はこれを覆いかくれたままにすることはありません。「1テモテ5:24 ある人たちの罪は、さばきを受ける前から明らかですが、ほかの人たちの罪は後で明らかになります。」

3B 死病 22-23

²² 見よ、わたしはこの女を病の床に投げ込む。また、この女と姦淫を行う者たちも、この女の行いを離れて悔い改めないなら、大きな患難の中に投げ込む。

主は、報いを与えられます。女またそれに追従する者たちは、床を不品行で汚していました。それを、「病の床」に投げ込まれます。これを聞いている当時の人々には、かなり強烈な言葉であったでしょう。当時、食事をする時、古代ローマの「トリクリニウム」という、ちょうどソファのように寝そべって食べる方式がありました。イエス様が、弟子たちと最後の夜、過越の食事を取られた時も、その方式で食べていました。そのような席で、異教の偶像礼拝と淫らな行いが行われていたのです。ですから、食べている席がそのまま床にもなり得る状況で、そこを「病の床」にするとされているのです。これは、具体的には性病にかかることでしょう。コリントの教会においても、近親相姦

を犯している男が、「I コリ 5:5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。」とあります。

そして次に、「**大きな患難の中に投げ込む**」とあります。これは、彼らが大きな苦しみに陥るといことですが、これはその時だけでなく、終わりの日の大患難のことを指し示していると思われます。「**教会が大患難を通るのか？**」という問いに対して、キリスト者の中で議論があります。携挙があるから大患難を通らない、いや通るのだ、という意見の分かれがあります。私はこう考えます。ここにあるように、偽りの教えを受け入れている、また初めから救われていないけれども形だけは敬虔を装っている者たちは、教会にしようとも大患難を通る、ということです。信じていると言っても、実はイエス・キリストを否認しているような者たちは、形だけは教会というものが残り、そして大患難の中で裁かれるのです。

イエス様は、天の御国の奥義の喩えで、毒麦が畑にまかれることを語られました(マタイ 13:24-30)。毒麦が蒔かれているので、目に見える教会は偽物が混在している状態です。けれども、はっきりとするまで待ちなさい、さもないと良い麦も抜き取ってしまいます。だから、早まった判断を私たちは抑制すべきです。しかし主が裁かれます。そして黙示録 17 章に、まさにイゼベルのような女が、大淫婦バビロンの姿が出て来るのです。そこでは、世界の国々の王たちがその女を淫らな行いをして、女は富を蓄え、そして真実に主に従う者たちを殺し、足で踏み倒して、流血の罪を犯しています。しかし、その女は自分の乗っていた獣によって倒れていきます。教会の中に世が入ると、教会が形だけのものとなり、その形は大患難の時代にも残っているのです。背教の教会です。

²³ また、この女の子どもたちを死病で殺す。こうしてすべての教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知る。わたしは、あなたがたの行いに応じて一人ひとりに報いる。

「この女の子どもたち」というのは、女の教えを受けた継承者たちのことです。彼らは、その教えによって死病をもって主によって裁かれます。そして主は、「**すべての教会**」と言われていますね、これを見せしめとされます。全ての教会に知られることになり、それで人々が主を恐れるのです。神の聖さに対する恐れを抱くことは健全です。ペテロが、アナニアとサツピラに対して主の裁きを宣言して、それで彼らが死にましたが、「使 5:11 そして、教会全体と、このことを聞いたすべての人たちに、大きな恐れが生じた。」とあります。

そしてここにある、「**人の思いと心を探る**」であります。正確にはギリシア語で「人の心と腎臓を探る」となります。ユダヤ人にとって、人は心で思い、そして内蔵で感じるとされていました。したがって、人々には覆い隠されていて、誰にも築かれないような暗闇の業も、主はことごとく探られる方なのだ、ということです。そして、「**あなたがたの行いに応じて一人ひとりに報いる**」とあります。主は公正な方です。連帯責任ではなく、それぞれ主が任せておられることになって、各々に報いを

与えられるかたです。

4A 持っているものの保持 24-25

²⁴ しかし、ティアティラにいる残りの者たち、この教えを受け入れず、いわゆる「サタンの深み」を知らないあなたがたに言う。わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。

このような教会にあっても、それでも主はご自分に忠実な者たちを残しておられます。イゼベルの教えについて、「**「サタンの深み」を知らない**」とあります。この教えには、ティアティラで蔓延っていたギルドによる異教の儀式には、忌まわしい性的倒錯だけでなく、オカルトの要素も含まれていました。また、ニコライ派の教えと同じように、グノーシス的な要素もあったでしょう。自分たちだけが霊の知識を得ている。霊肉二元論になっており、肉体に対して行っているのは、神にとっては関わりのないことだ。だから、肉欲を燃やしてもそれは一向にかまわないということになります。

霊の戦いにおいて、私たちは、これまできれいに見えていたもの、良いとされるもの、正しいとされるものに、実はサタンの深みがあることを知ります。チベット仏教のようなオカルトを含む儀式においては、その悪霊の働きを生々しく見ることができますが、そういったものでなくとも、巧妙なサタンの仕業があります。それを受け入れない、という決断が必要です。ここで、「**知らない**」とあるところが大事ですね。それを知るために試す必要はありません。むしろ、純粋に福音の中に留まっていればよいのです。分裂とつまずきをもたらす者たちについて、パウロがこう勧めました。「ローマ 16:18-20 そのような者たちは、私たちの主キリストにではなく、自分の欲望に仕えているのです。彼らは、滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています。19 あなたがたの従順は皆の耳に届いています。ですから、私はあなたがたのことを喜んでいますが、なお私が願うのは、あなたがたが善にはさどく、悪にはうとくあることです。20 平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」

²⁵ ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかり保ちなさい。

主が戻って来る日まで私たちがしなければいけないことは何か？それは、「持っているものを、しっかりと持っている」ことです。私たちに任された福音をそのまま持っていることであります。それ以上のことをする必要はありません。「2テモテ 1:13-14 あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛のうちに、私から聞いた健全なことばを手本にきなさい。自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」これが、私たちが携拳を待つことについての正しい姿勢です。

5A 諸国の民の支配 26-29

²⁶ 勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。²⁷ 彼

は鉄の杖で彼らを牧する。土の器を砕くように。²⁸ わたしも父から支配する権威を受けたが、それと同じである。また、勝利を得る者には、わたしは明けの明星を与える。

勝利をする者たちに対する、約束です。エペソにおいては、神のパラダイスにおけるいのちの木の實でした。スミルナにおいては、第二の死からの救いでした。ペルガモンに対しては、隠れたマナ、新しい名の記されている白い石でした。そしてティアティラに対しては、「諸国の民を支配する権威」であります。

このことを説明する前に、「最後までわたしのわざを守る者」とありますね。主が来られる時まで、その最後までしっかりと主のわざを守る者ということです。私たちは初めに走っている時をいつも注目します、しかし、最後まで走ったのか、完走したのかが大事です。ヘブル書において、終わりまで確信を保っていることの大切さを教えています。「ヘブル 3:13-14「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにしなさい。私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です。」

そして、「諸国の民を支配する権威」であります。これは初めに読んだ詩篇第二篇の続きであります。「2:9-11 あなたは鉄の杖で彼らを牧し 陶器師が器を砕くように粉々にする。』それゆえ今王たちよ悟れ。地をさばく者たちよ慎め。恐れつつ【主】に仕えよ。おののきつつ震え子に口づけせよ。」神の御子に対して、地の王たちが口付けして仕えます。このキリストと共に統べ治める権威が与えられるのです。ティアティラが、軍の守備隊が置かれていた町であったことを思い出してください。主ご自身にすべての軍隊を滅ぼし、国々を支配する力が与えられているのです。先に、ローマ 16 章で読んだように、悪い者たち、教会につまずきや分裂をもたらすものを避けて生きる時に、そしてそういったことが起こっていても自分はただ、善にさとく、悪に疎くある時に、主が速やかにサタンを私たちの足で踏みつぶし、それで平和を確立されるとありました。黙示録 19 章にも、鉄の杖による統治が書いてあります。羊飼いが木の杖で羊を飼うのですが、鉄ということで強い力をもって反逆者を罰することのできる杖であります。

そして、「わたしも父から支配する権威を受けたが、それと同じである。」とありますね。父なる神が御子と一つになっているのと同じように、私たちが神とキリストと一つに交わるので、その権威が私たちにも任されるのです。船長が、舵を回すその舵がとても小さいけれども、巨大な船を制御するように、私たちはイエス様への小さな信仰を持っていることによって、世界を支配することになります。その備えを今、行なっています。小さなことに忠実であれ、ということはそのことです。

そして、「わたしは明けの明星を与える」というのは、キリストご自身が明けの明星と呼ばれています。ペテロが、イエス様が高い山で変貌されたのを目撃して、それでこう言っています。「2ペテロ 1:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星が

あなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」明けの明星は、暗き夜において光の始まりであり、そしてそれが太陽となり輝く、希望の光であります。その光に、私たちもキリストと一つになっていることで輝くのだということです。

²⁹ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。』

全ては、御霊が語っておられることです、そして聞く耳があるかどうかであります。祈り、私たちの耳がいつも御霊に開かれているように祈りましょう。